

羽田貞義の研究

堀 浩太郎

A Study of Sadayoshi Hata

Kotaro HORI

(Received October 1, 2008)

はじめに

日本の近代公教育制度は今年で発足して130余年になる。この間この制度はさまざまな改変を求められ、それを果たしてきた。制度の基盤である小学校は全国津々浦々に存在し、地域住民と密接な関係を育んできた。小学校は地域の核として重要な地位を占めている。それゆえ、今日に至っても「家庭・学校・地域」という三者の結びつきの重要性を否定するものはいない。この原初形態は、日露戦争後の地方改良運動期に登場し、昭和初期の郷土教育運動や戦後初期の地域教育計画運動へとつながっていく（もちろん、三者の各理念には固有のものも存在するが）。

そこで、この三者の關係に初めて注目や関心が寄せられた地方改良運動期を対象に、三者の關係構築・展開がどのような意図のもとになされ、それがその後の歴史上にどのような影響をもたらしたかを明らかにすることを最終課題とする。本研究はこの課題へのアプローチの一環をなすものである。

地方改良運動は、大島美津子や宮地正人ら¹⁾によって明らかにされているように、日露戦争後の疲弊した町村の再建と農村内の地主的支配秩序の再編強化が、内務省主導の下に進められ一定程度の成果をみた運動である。町村の有力者と町村民の両者をより強固に結びつけこの運動を推進していったのが、小学校（校長）であった。宮城県と群馬県を対象に、この具体的な活動事例を示したのが笠間賢二²⁾である。笠間は、地方改良運動が政策上「内務省を主として文部省を従とする内務・文部両省の協業として形成された」（群馬県）と指摘しつつ、そのことが小学校や教員の家庭や地域に対する影響力の増大を必然のものにしたとする。中央政府レベルの内務省（内務官僚）、地方レベルの知事、市町村長、小学校長・教員、青年層を含む地域住民の間にさまざまな団体の結成や關係の構築が、地方改良運動の前進に貢献したと³⁾。

しかし、上述の構図からいえば知事と市町村長および小学校（校長）の間に位置する師範学校長の役割を軽視しているといえる。もちろん全国すべての師範学校長がそうであったというわけではないが、少なくとも次に示す人物は忘れることはできない。

ひとりは大阪府天王寺師範学校長村田宇一郎で、大阪府東成郡生野村小学校を指導した。その経営を1910年『学校中心自治民育要義』⁴⁾に著し、文字通り小学校を核とした地方改良の成果を世に問うた。いま一人は熊本県飽託郡池田村小学校を指導した羽田貞義熊本県第一師範学校長である。彼も、池田村の実践を1915年に『通俗教育講話資料町村自治と報徳教』として、さらに1920年『学校を中心とする民育の実践』として上梓した⁵⁾。彼らの活動や著書はまさに「学校中心自治民育」運動を推し進める大きな力となった。

村田の実践に対する研究は、検証研究ともいえる籠谷次郎の「地方改良運動と村の学校—大阪府東成郡生野村の事例—」⁶⁾がある。羽田の実践については、宮坂広作が『近代日本社会教育政策史』に、松村憲一が『日本近代教育百年史 第7巻 社会教育1』に⁷⁾、概略を紹介した程度で本格的な研究はいまだ不十分といえる。

村田と羽田はともに高等師範学校博物科出身（卒業年次は羽田が3年早い）という共通点を持つが、村田による生野村小学校の経営は明治末期、羽田による池田小学校経営は大正初期である。つまり村田が生野村小学校の経営に専心していたころ、羽田は群馬県師範学校長として群馬県下各地を巡回し報徳思想を鼓吹していた。彼の講演を機に多くの町村が報徳思想を基盤に、小学校をも巻き込んだあらたな地域づくりに邁進していったのである。その一方で、有能な教員を代用附属四萬小学校に派遣して、単級学校経営のみならず「学校中心自治民育」実践を蓄積させてもいた。また、群馬県の教育方針策定にも大きく関与していたと証言する教え子もいる⁸⁾。こ

のように群馬県師範学校長時代にさまざまな経験を積み重ねていたからこそ、その後赴任した熊本県における池田村小学校の経営に羽田は成果を収めることができたといえよう。

そこで本稿は、群馬県師範学校長時代までの羽田貞義の思想と行動の一端を紹介する。次に、羽田は群馬県下の各地を回って報徳思想の普及に努めたが、その際大いに効果をもたらした⁹といわれる絵図の分析を行なう。

1. 羽田貞義の教育活動

羽田貞義についての記述は、彼の出身地である長野県から出版された郷土史や人物史にある。また、唐沢富太郎が『図説教育人物事典』¹⁰で、師範教育と社会教育の両面において活躍した人物として記述している。これらの記述の土台ともいえる『羽田貞義先生追悼録』（以後『追悼録』と略記する）によって、羽田の略歴を辿ってみると以下ようになる。

羽田貞義は、元治元（1864）年7月9日長野県小県郡滋野村桜井区寺島権左衛門二男として生まれる。幼名貞次郎。1880（明治13）年3月17歳の時同郡和田村羽田三郎の養嗣子となり、貞義と改名。同年11月長野県尋常師範学校へ入学。同校卒業後、そのまま残り助教諭、開智学校訓導を経て1887年4月24歳で東京高等師範学校へ入学し、博物学を修めた。1890年同校卒業後長野県尋常師範学校教諭となり、附属小学校主事、舎監を兼務し、1898年5月35歳の時新潟県師範学校教頭として転出。1903年2月40歳で群馬県師範学校長に着任。1911年4月49歳の時熊本県師範学校長に転任し、1918年1月から12月まで手塚岸衛のいる千葉県師範学校長に、同年12月56歳で福島県師範学校長として赴任し、1924年3月61歳で依願退職した。その後故郷和田村で様々な社会的活動をしていたが、1933年3月11日死去した。享年70であった。生前、1931年3月熊本市池田町富尾山に彰徳碑が、死後1937年11月和田村字唐沢に頌徳碑が建立された。

この『羽田貞義先生追悼録』のほとんどは、羽田が歴任した長野・新潟・群馬・熊本・福島の各師範学校時代の教え子や同僚（部下）の回想記で占められている。なかには50数年前を回想したものもあるので、取り扱いは慎重にしなければならない。しかし、当時の事情をよく知る関係者ゆえの貴重な証言や、文献資料などに残らない証言も多くある。よって『追悼録』を元に、当時の他の記録なども参照しつつ、羽田の履歴を詳述する。

長野県師範学校時代

羽田貞義は、長野県尋常師範学校卒業後同校に残り助教諭を、さらに松本にある開智学校の訓導を歴任する。このとき、表1にあるように教師用の『小学珠算教授法指南』と生徒用の『小学珠算指南』を1886年松本で出版した。

その後高等師範学校に進み「博物学」を専攻した。卒業後母校の長野県師範学校に奉職し、附属小学校主事や舎監を兼務した。当初は博物の講義を担当していたが、スタッフの兼ね合いから「教育学」の講義や「農業科」を担当した。

鳥羽耕治は、麟氏教授学の講義に際し「其の一章の境遇と教育の關係の段に於て、人は境遇によって変化發展するものであるから、其の境遇即ち家庭、学校、社会の状況を整理し、これに順応するやう指導するのが教育の主要の目的であるとし、孟母三遷の教の例や、進化論に基づく世界氣候風土の關係による動植物の変態や保護色の適例を示して、当時の私達生徒を大に感動せしめられた。」¹¹と回想している。ともすれば無味乾燥な時には睡魔をも呼び起こす教育学や教授学の講義を、進化論や卑近な東洋道德（孟母三遷の教えなど）を援用しつつ楽しく学べるよう工夫を凝らしたのである。また実業方面が軽視される中、農業科実習として「甘藷、米国種のゴールデンメロン、麦類、棉花や亜麻など」を栽培し、寄宿舎の周囲で豚や鶏や綿羊等を飼育した。しかもこれらの野菜や豚等は時々寄宿舎の食膳を賑わすこともあったという。これは博物科の延長という見方もできるが、実業なかでも農業重視という観点から、後の報徳思想受容の基盤に繋がっていくとも考えられる。

1889年憲法発布、翌年国会開設となり再び民権論や自由論が台頭するころ、これらの影響を受けて師範学校の寄宿舎でもさまざまな問題が起きようとしていた。羽田は「此の間の空気を看破せられて、新に室長會議なるものを設けられ、生徒の意見を聴取する所謂下意上達の方法を講ぜられた」¹²という。規律等による管理一辺倒ではなく、生徒の声を汲み上げ問題化する前に事を解決したエピソードといえよう。

この時期に羽田は『生物学講義』（表1参照）を1893年7月付けで出版している。これは、同年正月更植二郡

表1 羽田貞義の著作一覧

No.	編著書名	出版者・社	出版年月日	備考
1	小学珠算教授法指南	竹内禎十郎	1886(M19).10	能勢栄閣, 塩谷吟策訂 上巻 35 丁, 下巻 41 丁 ※青雲堂蔵版 (表紙見返し)
2	小学珠算指南	竹内禎十郎	1886(M19).10	塩谷吟策訂 巻之一 25 丁, 巻之二 27 丁, 巻之三 33 丁, 巻之 四 39 丁, 巻之五 49 丁 ※□□堂蔵版 (表紙見返し)
3	生物学講義	小山喜作	1893(M26).7.30	全 84P ※更植南部講習会筆記
4	母のための教育学	目黒書店	1906(M39).7.13	全 230P 小沢錦十郎と共著
5	実践倫理学講義	泰東同文局	1908(M41).4.8	全 282P
6	世渡り船略説書	佐野登米吉	1911(M44).5.7	全 57P ※売捌所 梅開堂
7	国民実践倫理講義	六盟館	1914(T3).5.20	全 286P
8	社会心相・人生之循環	稲本震作	1915(T4).3.20	各 25P, 15P
9	通俗教育資料講話町村自治と報徳教 全	明誠館	1915(T4).4.13	全 202P, 付録 18P
10	学校を中心とせる民育の実況	金港堂	1920(T9).4.30	全 317P
11	修身講話	西沢福島支店	1922(T11).4.16	全 70P

南部教育会主催の生物学の講習会筆記を元にして、この講習会を 17 歳で受講した小平高明は「(羽田は一注引用者) 重厚の資、莊重の弁を以て該博な蘊蓄を傾け尽して講演せられた。(中略) そのときの講演中にあった進化論の如きは受講者全部初耳のこととて、いづれも驚異の眼をみはったのであった。」¹³と回想している。専門の博物学に関する造詣は深く、和田猪三郎の回想¹⁴にもあるように羽田の講義は生徒の肺腑を衝くものであったといえよう。

新潟県師範学校時代

羽田が新潟師範学校へ教頭として赴任したのは 1898 年 5 月である。校長は島根から転任してきた和田豊。彼は当時の師範学校長のなかでも「鎮撫校長」と綽名されている。すなわち、和田校長着任前の数代の新潟師範学校校長は師範学校教諭や生徒あるいは知事、はては文部省まで巻き込む紛争対立の責任をとって更迭されており、そこに「鎮撫校長」たる和田校長の登場となったのである。しかし、厳格一辺倒では師範学校教諭・生徒の人心掌握や学校経営も順調に事は運ばない。同時に着任した「温厚篤実なる徳望家」¹⁵の羽田の存在は大きいといえる。

しかし、そのような和田校長・羽田教頭体制下でも、腸チフス患者出現の対処法を契機に生徒が寄宿舎を大量に退去する事件が起きた。この時の問題解決に中心となって対応した羽田教頭の姿を佐藤秀平は「温厚篤実の風格は先づ生徒の信頼を一身に集めた。爾来和田校長と名コンビでよく学校経営の任に当られ、校風一新へと邁進された。(中略) 恰も慈母の如き懐しみを感じてゐる。在学中一度も先生に叱られたこともなく、又先生の怒られた顔に接したこともなく、何時も温容を以て生徒に接せられて居られた」¹⁶と回想している。この佐藤の言にあるように、新潟師範では「剛」の和田校長を補佐する「柔」の役割を羽田教頭は担当したのである。

羽田が群馬師範学校校長へ転任するにあたって『越佐教育雑誌』に掲載された記事¹⁷の一部を紹介しよう。

(前略) 三十一年五月新潟師範学校教諭に転じて今日迄数年、全一学校に勤続し其間数々校長に推薦せられたることありしも、一意専心教授の改良と後進の誘掖に力を尽くし側ら新潟県教育会並に市教育会の役員に推されて経営する処頗る多く、本県教育界に臻せる功績は頗る大なるものあり。氏の為めには榮転を賀すべきも本県教育界に良教育家を失ふは甚だ遺憾とする処なり。氏の資性誠実沈着にして事を処する公平周到職務に勤勉にして

然かも度量の能く衆を容る、ありて職員生徒の心服すること実に深かりし、顧みれば新潟師範学校の騒動は一時天下の耳目を聳えしめたることありしは已に過去に帰したり、腸ちぶす事件の為に寄宿生の脱門せし事も一場の夢となりぬ、明敏にして老練なる和田校長を補佐するに着実にして励精の羽田教諭あり、職員の一能く行はれて教務室の常に和氣霽然たる談笑を見るは近年稀に見る処の校風たり、脱門事件の為に停学を命ぜられたものも善後の宜しきを得て昨年十月全く本校を卒業し良好なる小学教師として地方に奉職し、現在の師範学生は皆入学の初めより二氏（和田校長と羽田教頭—引用者注）の薫陶に浴するものにして職員生徒の間毫も沮格するなく、之を学業の進歩に徴し之を運動の活発なるに見れば実に五六年前の師範生と一変せり、（後略）

この記事の後段にあるように、羽田は難治の新潟師範学校を和田校長とともに経営に当たり、「全国有数の模範学校としてその名声を博す」¹⁸に至らしめたのである、『追悼録』所収の回想も当時生徒だった者の回想が大半なので、勢い学校騒動（腸チフス事件）に関わるものが大半である。

新潟県・新潟市の教育会役員の仕事で付言すれば、1901年教育品展覧会の委員長を務めているが、この経験は後年群馬県で開催した1府11県聯合共進会開催時の教育品展覧会運営に役立ったものと思われる¹⁹。

新潟での教鞭は教頭職にあるためか、修身（倫理学）のみであった。そこでは、貝原益軒の五常訓を講述口授したり、「修身の講義に有機化学の分子式を書いて、親和といふ事を説明せられた事を覚えて居る」²⁰という回想もある。

群馬県師範学校時代

羽田は1903年2月群馬県師範学校校長として着任した。前年12月巻き起こった教科書疑獄事件で群馬県師範学校校長が逮捕され、その後任としてである。事件で空席になったポストの文部省による補充方針を、『越佐教育雑誌』が次のように伝えている。「補充任命に関しては、可成此際老朽を淘汰し若手を採用するの方針を取り、教育界に於ける腐敗分子を一掃することに内定し、今後補充任命する者は全く疑獄事件には無関係なる主席教諭或は次席教諭中の、有為の人物を榮転せしむる見込みなり」²¹と。

40歳が当時としては若手に当たるかは別として、新潟県師範学校教頭の羽田に「全く疑獄事件には無関係なる主席教諭或は次席教諭中の有為の人物」として白羽の矢が当たったのである。しかし、今井伴次郎の回想に在る如く当時の群馬師範は、教科書疑獄事件の処理、寄宿舎・服務規律・服装問題等を抱えており、決して平穏な学校ではなかったが、「（羽田校長はこれを一引用者注）静かにあせらず、堅実にして底知れぬ温情を以て処理」したという²²。

群馬時代は師範学校のトップということもあり、生徒・同僚の回想には羽田によって引き立てられたことを感謝する言葉が多く見られる。県内各地を所用で訪れた際にも、これはという人物に声（目）を掛け後に何らかのポストにつけるよう尽力している姿が、これらの回想記から読み取れる。

もうひとつ挙げられるのが、羽田の担当した修身の授業についてである。1905年度の修身の授業は全部で15コマあり、教頭の佐藤穂三郎とともに羽田はその内の10コマを担当している。教科書は、第一学年：山本信隆の『論理教科論語抄上巻』と口授、第二学年：山本信隆の『論理教科論語抄下巻』と和田豊の『修身要義』、第三学年：口授、第四学年：田辺慶弥（書名なし）と法制教科書となっている²³。1902年入学した今井伴次郎が羽田と接するのは2年次になってからであるが、羽田の修身の授業について「上級になつて修身の御講義をうけた。先生の御講義はドイツ・アメリカ等の倫理学や哲学の直訳的なものではなく、全く日本式修身倫理観に立脚したものであつた。当時の若い者に取つては、少々難解でも翻訳的なものでないと喰い足りない感じがしたものであつたが、追々と先生のお話を承るにつれ、極めて平易な中に崇高な真理と深い含蓄のある条理の織込まれてゐることが解るやうになつた。」²⁴と回想している。また1907年前後に授業を受けた平井佐市は「先生が修身科を講ぜられる際は、温顔に微笑さへ浮べられ、毫も窮屈の感なく、極めて平易明快に示教せられるのが常であつた。偶々人倫道德の根源は宇宙間に於ける万有構成の原理と一致するものなることをベンゾール系統により図解せられた。併しながら未だこの種の素養少ない生徒等にとつては、これは難解なことであつた。」²⁵と述べている。この二人の回想や教科書から、羽田の修身科授業は新潟師範時代と同様、日本や中国の倫理学（修身）に基づくものであったこと、そして博物学の知識を応用した比喻を用いていたことがわかる。

最後に、ほとんど全ての寄稿者が報徳教の布教者としての羽田について述べている。そのなかで田部井鹿蔵（羽田校長赴任の2年前に卒業）の回想²⁶を紹介する。

時弊の匡救及び社会教育 先生の御在任中、特筆すべき大きな御業績は、師範教育本来の面目たる教育者とし

ての精神気魄を涵養せられ、且躬行実践せられたことであります。それから社会教育・民風振興の方面に貢献せられたことであります。時恰も日露戦争直後、人心動もすれば輝く戦捷に酔うて、浮華驕慢、軽薄に流れる風さへ生ずる恐れなしとしない情勢が見えました。これは上州一局部の現象のみでなくして、全国的にも左様であつたのであります。先生は深く之を憂へられ、二宮尊徳先生の遺教たる報徳精神を鼓吹し、分度生活を提唱せられ、これを県下各地に実施し、御自身その実現指導に乗り出されたのであります。今日と異つて、当時は交通の便未だ開けず、山間部は幹線と雖もガタ馬車の通ずるのはよい方で、支線に至つては人力車又は馬背に依るか、然らざれば草鞋穿きで踏破する外なかつたのです。先生の熱誠は是等の障碍を克服して、利根・勢多両郡を始め其の他郡市に逐次報徳社或は報徳主義体制の樹立を見るに至り、いづれも一村一郷の経済更生、道義振興を実現し、これがやがて県下を風靡して時弊を匡し救ふことに寄与されたのであります。又父兄会或は講演会等の招聘には何時も快く応ぜられ、先生独特の考案に成る「新社会地図」といふ絵図を用ゐて人生行路を何人にも納得出来るやう平易に説話し、啓蒙教化に力められたのです。即ち時に陰阻なる山路を攀ち登り、或は激流を渉り、或は不屈不撓長途の行旅に耐へ、斯くて道義生活を完うしたるものは尊く、安易の近徑を欲望に任せて往くものは墮落の深淵に陥る意を現はしたのであります。謹嚴な先生が碎けた諧謔を交へて、然も力の籠れる講演をなさつたのですから、極めて印象的であり、聴衆の心を動かして人々を實踐へ押進めたのは当然と謂ふべきであります。又別に幾株かの金のなる木といふ樹木の絵を考案され、勤勉・儉約等の肥料を培ふことに依つて生育・繁茂・結実することを示し、更にこの対幅として、肩先や手先に文字で象取つたうそや、借金鳥等が止つてゐる貧相な男が火の車に乗つてゐるところを、青鬼がその男の襟首をむんずと掴んで後方に引戻してゐる絵図などに依つて、善

表2 羽田貞義の論文・寄稿文一覧

No.	論文・寄稿文名	誌名・巻号	頁	発行年月	備考
1	戸隠山植物採集	『信濃教育会雑誌』48	15-17	1891(M23).9.25	会員
2	同(前号の続)	『同』49	12-14	1891(M23).10.25	同
3	生物実験法	『同』54	10-13	1891(M24).3.15	同
4	一滴の汚水	『同』57	20-24	1891(M24).6.25	同
5	信濃産有毒植物	『同』72	23-24	1892(M25).9.25	同
6	同(前号ノ続)	『同』73	22-25	1892(M25).10.25	同
7	通俗理科雑談	『同』89	31	1894(M27).2.25	
8	高等科第一、二学年理科ニ就テ	『同』92	3-7	1894(M27).5.25	在長野
9	通俗理科雑談	『同』93	14-15	1894(M27).6.25	同
10	耳目ニ触ルヘモノ皆我師	『同』105	12-13	1895(M28).6.25	同
11	道德ハ相互ノ関係ヨリ成立ツ	『同』117	1-3	1896(M29).6.25	同
12	道德ハ関係ノ真理ヨリ成立ツ	『同』119	1-4	1896(M29).8.25	同
13	准教員養成法ノ一斑	『同』121	5-7	1896(M29).10.25	同
14	教論的教育(倫氏教育学ノ術語ヲ用ユ)	『同』128	1-5	1897(M30).5.25	
15	新年の辞	『上野教育会雑誌』219	1-4	1906(M39).1.15	
16	無感無想	『新佛教』8-4	5	1907(M40).8.?	群馬県師範学校校長
17	談叢 其の十	『日本之小学教師』104	45	1907(M40).8.15	同
18	師範新卒業生に対する希望 其十一	『教育実験界』21-7	33-35	1908(M41).4.10	同
19	篤農船津伝次兵衛	『斯民』3-6	58-61	1908(M41).8.7	同
20	向上的生活法	『教育界』8-6	104	1909(M42).4.3	同
21	地方青年指導要目	『教育時論』960	4-7	1911(M44).12.15	同
22	勤勞の鑑	『斯民』8-10	83-84	1914(T3).1.1	熊本県師範学校校長
23	祝辞及感想	『日本之小学教師』184	30	1914(T3).4.15	同
24	熊本出町少年義勇団の概況	『斯民』10-5	56-59	1915(T4).8.1	熊本県第一師範学校校長
25	新年を迎えて	『熊本県教育会報』96	2-5	1918(T7).3.	第一師範学校校長
26	郡青年運動大会に於ける所感	『同』96	22-23	同	同

困善果、悪因悪果の理法及び道德の体系を不知不識の間に会得悟了させようとする御意図であつたのではないかと推察するのであります。今日盛んに行はれる映画教育とか幻燈・紙芝居などと着眼を同じうするものでせう。否、先生のこの着想はそれ等の先駆をなせるものと謂ふべきでありませう。

羽田の社会教育活動は戊申詔書の渙発（1908年10月）を契機に盛んになったという指摘が多い。師範学校内での「郵便切手葉書自由販売」制度の開始は1906年4月からであり、これの成功を踏まえての「寄宿舎共同購買組合」の設置（1908年4月）²⁷は、「道德と経済の一致」という報徳の理念の一部を自らの足元で実践している。しかし、回想記に「先生が教化運動に大いに力を御尽しになられたのは、戊申詔書渙発からであると思ふ。」²⁸とあるのは、同年10月渡部事務官とともに戊申詔書の趣旨を広く一般に知らしめるために群馬報徳団体の設立を主唱したり²⁹、師範学校内に戊申報徳社を設立し1909年1月その発会式を行なう³⁰など、目覚しい活動を始めたからであると思われる。

ここで、あらためて羽田の著した論文・著書を表1及び表2によって概観してみよう。論文は寄稿文を含めて26点³¹、著書はパンフレット様のものも含めて11点である。

最初の算術教科書を除くと、長野県時代は「博物」に関する論文・著作から「道德」への関心の移行が見取れる。新潟県時代は論文・著書とも見出せなかった。新潟師範の経営に専心しなければならなかったからだろう。著書4の『母のための教育学』は群馬県時代に発行しているが、中心になって執筆しているのは新潟県長岡高等女学校教諭の小沢錦十郎である。小沢が『越佐教育雑誌』に投稿した論文をまとめたものであるが、注19にあるように羽田が新潟県教育会及び市教育会の役員を歴任中女子教育振興の任を負っていた関係上一部を執筆し、共著としたと考えられる。群馬県時代以降、師範学校の「修身科」用教科書（著書5・7・11）を除くと、論文・著書ともに報徳思想を普及させるためのパンフレット（著書6・8）や講演集（著書9）、報徳運動の実践史（著書10）と分類でき、ほとんど報徳関係一色といえよう。

羽田による報徳思想の普及活動によって、いくつもの模範村が生まれたり表彰を受ける人物が生まれたこと、あるいは羽田が群馬県教育政策（方針）策定への関わりなどは稿を改めて論じたい。

2. 報徳思想普及の絵図

『追悼録』の回想には、何人ものひとが絵図の効果を謳っている。視覚は、言葉よりも直截に物の本質を伝えるところがあるからだろう。次に示すのは著書8の『社会心相・人生之循環』の例言の一部³²である。

一体絵に就て説明を始めたのは心理学の応用で、唯耳のみから入れたのは兎角忘れ易い。御承知の通り知覚といふものは、五感の作用が悉く集まつて確實となるものである。仮令ば、或事柄を記憶するにも、視、聴、臭、味、触、筋肉覚、等に訴へて各種の形質を完全に知つたものは一生涯忘れない。然し無形の道德上の事柄を、各種の感覚器に訴へることは到底不可能のことであるから、責めては耳と目との二つから入れたら、頭に残る事も多いだらうと思つて明治四十年頃から諸種の講話に絵画を応用して、其確實なことを経験した結果、曩に新社会地図、世渡り船、人生の行路、立身鳥（鳥—引用者注）、なまけもの退治の五枚を一綴として、夫々簡単な説明を付して世に公にし（た。）

高等師範学校卒業者ならではの説明である。この理由以外に考えられることは、当時すでに幻灯機は普及していた³³とはいうものの、悪路や山間僻地へ携行するのは困難を極めたことと思われる。絵図ならば携行に支障が少ない。元々明治初期から中期まで学校では教科書を補う便法として「掛図」が使われていたこともヒントになったのではないだろうか。

さて、この種の絵図は羽田の発案により、群馬県師範学校教諭岡田啓蔵³⁴が作成したといわれている。しかし、どのような絵図がいつごろ、何種類作成されたかは明言できない。上記引用文によれば、1907年ころから「新社会地図、世渡り船、人生の行路、立身鳥、なまけもの退治」の5枚を1セットとして公にしたという。『追悼録』の櫻井菊次郎の項には「新社会地図（社会生活の径路を示した处世教訓地図）、金のなる木、火の車」が、田部井鹿蔵の項は「金のなる木（中略）、火の車」（前掲、引用文参照のこと）を挙げている。1910年4月発行の『地方改良事蹟』³⁵には、「金の生る樹・餅搗きの比喩・師範学校長の考案と社会地図・道德と汽車の比喩」が群馬県

の項に挙げてあるが、絵図は一切掲載されていない。これと同じものが1911年4月発行の『地方経営小鑑／地方行政史料小鑑』の中の「地方経営小鑑」³⁶にあり、「金の生る樹」のみ付図はないものの、「餅搗きの比喩・新社会地図・道徳と汽車の比喩」には付図がある。

この段階で絵が見つからないのは、「金の生る樹、世渡り船、人生の行路、立身鳥、なまけもの退治」の5点となった。このうち「金の生る樹」は『高崎市教育史』³⁷に「皆勤票」として掲載してある。同票（図4参照）には、「金の生る樹 県立師範学校長羽田貞義先生考案」として、根を「心」の文字で図案化し、以下同様に、幹―辛抱、枝―勤労・節儉・勤労・節儉 になぞらえて一本の木として描いてある。この絵の両脇に3首の道歌「富と貧の花咲く木々をよく見れば心の植ゑし実のはえしなり、昔しまく木の実大樹となりけり木の実後の大樹ぞ、踏まれても根強く忍べ道芝のやかて花さく春を待ちつゝ」が添えてある。「地方経営小鑑」所載の本文の説明と比べると、1首の道歌を除けばほぼ同一であるので、これが「金の生る樹」にまちがいはない。

「人生の行路、立身鳥、なまけもの退治」の絵図を筆者は2003年8月熊本で発見した。絵図のタイトルは「人生之行路、立身鳥、なまけもの」（図1～3参照）である。内容から見て、『追悼録』の櫻井菊次郎及び田部井鹿蔵のいう「火の車」は「なまけもの」と同一と考える。3点とも「羽田貞義考案、岡田啓蔵製画」で、印刷・発行は高崎市の梅開堂・佐野登米吉³⁸である。「人生之行路」の発行は、1911年6月24日。「立身鳥、なまけもの」は同じで、同年9月22日である³⁹。とまれ頒布用に印刷した絵図5点がそろったのは、1911年9月末以降ということがわかる。このことから、当初は各地を講演で回る際持参していた絵図であるが、地元から頒布の要請が募り印刷するに至ったのではないかと推測できる。ならば、絵図の原案の一部は羽田自身が述べているように戊申詔書発布の前年1907年ころには出来上がっていたといえよう。

これらの絵図に共通する点は、庶民にとって受け入れやすい諸道徳理念を心学・道学そして報徳思想の観点から再構成しつつ、わかり易い絵図そして道歌をそえて説得力を強化していることである。絵も巧みで、「立身鳥」を例に取れば、鳥の体全体（翼や尾羽までも）に「知識・誠実・共同・勤儉・奮励」の文字がはめ込まれている。講演者は、伝えたい道徳を、絵図を指し示しながらリズム感のある道歌に乗せて、訴えるのである。効果は十分といえるだろう。

ま と め

羽田貞義は高等師範学校で博物を専攻したが、長野師範では博物学のほか教育学や農学も担当した。教育学の講義の一端を、鳥羽耕治は「五段教授法の第三階段連絡法の説明であった。先生曰く、連絡の程度は自然の連絡によるべく、一見余りにかけ離れた付会的連結を為すまじく、例へば『大風吹いて大工喜ぶ』と云ふ如き類なりと、落語に類する其の説明に、生徒一同思はずどつと笑って和やかな空気が流れた。」⁴⁰と回想している。難しい事柄を卑近な例で説明する術を羽田はすでに会得していた。また、附属小学校主事・舎監主任の任務は師範学校経営の能力を磨くことになり、新潟師範時代の困難も乗り越える糧となったといえるだろう。また農学を指導することから実業重視の姿勢も培われたといえる。新潟師範では倫理学や修身を担当した。回想記によれば、その授業内容は欧米のものではなく、日本の儒学者のものであったという。教頭職という激務をこなしながら、群馬師範では師範学校のトップとして学校経営にいそしみながら、修身の授業を担当した。修身の授業内容は新潟師範学校以来、日本・中国の倫理（修身）さらには二宮尊徳の思想に占められていったと考えられるが、今後の調査に期待したい⁴¹。

しかし、何より羽田の評価を高めたのは校外における社会教育活動である。戊申詔書発布以来県下各地を巡回し、報徳思想の普及に身銭を切って努力した⁴²ことである。講演の成功を得るための絵図の考案（発明）も教育者ゆえに成しえたと考える。

羽田貞義の研究は思い立って10年以上たつ。この間資料収集に励み、ここ数年は群馬県へ資料調査に出向いている。本論稿は、2005年5月全国地方教育史学会（於福島大学）で「羽田（はた）貞義の教育活動」と題して発表した草稿を基にしている。

最後に、群馬県立文書館・群馬県立図書館・前橋市立図書館・群馬大学教育学部の各機関及びスタッフの方々にはとてもお世話になった。末尾ながらここに謝意を述べさせていただく。

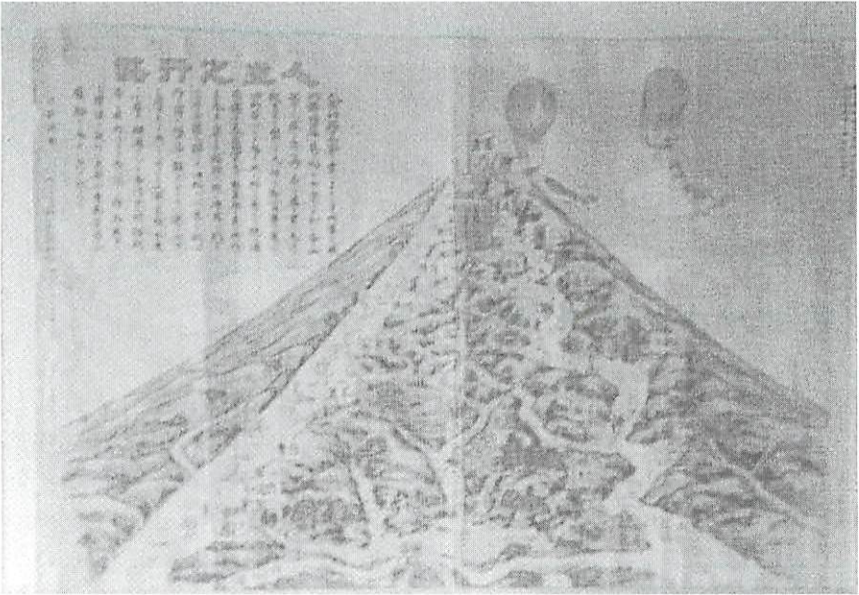


図 1



図 2

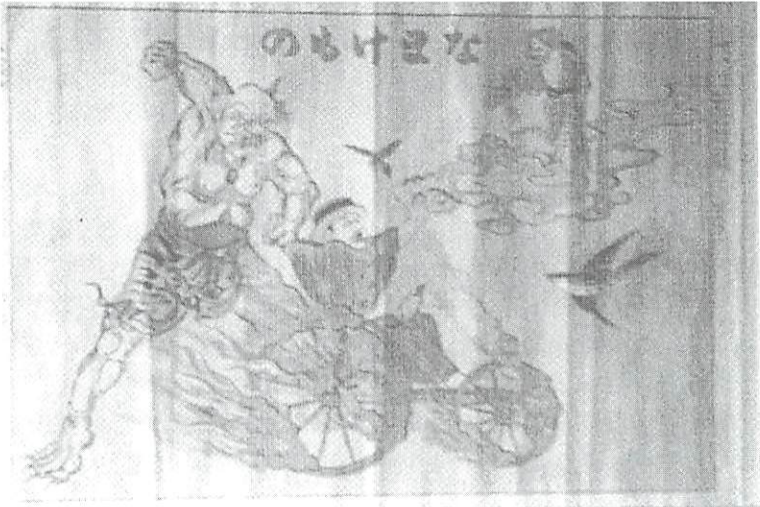


図 3



図 4

注

- 1 大島美津子（1994）『明治国家と地域社会』岩波書店、宮地正人（1986）『日露戦後政治史の研究』東京大学出版会 復刊第2刷。
- 2 笠間賢二（2003）『地方改良運動期における小学校と地域社会』日本図書センター
- 3 同上書
- 4 宝文館発行。
- 5 前者は明誠館、後者は金港堂より出版された。
- 6 籠谷次郎『日本教育史基本文献・資料叢書 19 籠谷次郎日本教育史論集—明治期地方教育史の諸問題—』（1993）大空社 所収。
- 7 宮坂広作（1966）国土社、松村憲一（1974）財団法人教育研究振興会。
- 8 鷲峯会編（1944）『羽田貞義先生追悼録』pp.147-151
- 9 同上、pp.137-138、154-155
- 10 唐沢富太郎編著（1984）ぎょうせい、中巻 pp.533-536、下巻 pp.701-703。ただし、羽田の読みを「はだ」としているのは誤りである。『群馬県教育史』も「はだ」と読んでいる。当時の『上毛新聞』のルビも「はだ」となっている。止むを得ないかもしれないが、羽田貞義は元首相の羽田孜氏の祖父にあたり、かつ長野県立図書館にも確認をとったので「はた」の読みには誤りはないと思う。
- 11 前掲『羽田貞義先生追悼録』、鳥羽耕治の回想、p.57
- 12 同上書、p.59
- 13 同上書、p.45
- 14 「私は羽田先生の御講義を拝聴する以前に習った博物は、叙述と暗誦に偏した学問の様な気がしてゐましたが、先生は実物の観察と実験の結果を基礎とし、それから推定された確信に立ってお話でありましたから、素養のない私達にもよく理解ができて、自然物の学問の面白味を覚えたやうに思ひます。」同上書 p.80
- 15 前掲『羽田貞義先生追悼録』、中村寅五郎の回想、p.91
- 16 同上書、pp.89-90
- 17 第122号 1903年2月 p.47
- 18 前掲『羽田貞義先生追悼録』、中村寅五郎の回想、p.91
- 19 羽田は1898年9月新潟市教育会席上で「女子教育に就きて」という演説を行っている。『越佐教育雑誌』第70号 1898年10月 pp.29-30

其要旨ハ（一）遺伝の重んずべきこと（二）胎内教育懐妊中の影響、米国タル子ル氏の実験、濃尾震災後の出産、古来偉人出生前に妊婦の靈夢祈願等是由因のありしこと等（三）家庭教育武士の話（四）学校教育（五）社会教育（六）自然教育（七）自身教育等の七目を挙げて、女子教育の重んずべきことより条約改正の結果内地雜居等に至らば自然影響を受くるべく、其際に於て社会の権力を保つべきを要すること、対等権力ハ智力德行、体力、富の四要件あるべきこと及び凡ての秘密を採るハ婦人に限ること等、種々例を挙げ証を示し熱心に演ぜられ、特に本市の如きハ女子教育に適せずとの説に反駁を加へ、寧ろ一層の奮発を要する旨を敷愆されたり。

また、同誌第 80 号（1899 年 9 月）には羽田が幼稚園設置の件を報告したとの記事がある。

20 前掲『羽田貞義先生追悼録』、宮波治郎の回想、p.94

21 第 122 号 1903 年 2 月 p.47

22 前掲『羽田貞義先生追悼録』 p.114

23 群馬県師範学校『群馬県師範学校年報自 1905 年 4 月至 1906 年 3 月』 1906 年 8 月

24 前掲『羽田貞義先生追悼録』 p.115

25 同上書、pp.152-153

26 同上書、pp.136-138

27 群馬県内務部第三課『群馬県教育事績』1910 年 10 月 15 日 pp.8-24

28 前掲『羽田貞義先生追悼録』、櫻井菊次郎の回想、p.127

29 上毛新聞 1908 年 10 月 22 日（木）2 面 №.6433

30 前掲『群馬県教育事績』、pp.3-8

31 但し、福島県教育会発行の雑誌は未見なので、今後増える可能性はある。

32 p.1

33 沼田市史編さん委員会（2002）『沼田市史 通史編 3 近代現代』pp.259-260

34 岡田啓蔵は 1903 年 12 月 7 日付で、群馬県師範学校教諭、1906 年 3 月 31 日付で、群馬県師範学校教諭となり、1919 年 12 月 23 日付で依願退職した。群馬県立歴史博物館（1991）『群馬県立歴史博物館所蔵資料目録—美術工芸—Ⅱ』p.34

35 第 1 章 地方経営及教授資料 pp.39-47

36 p.231, pp.221-222, pp.64-67, pp.74-75

37 高崎市教育史研究編さん委員会（1982）別巻（写真資料編）「3 皆勤票 明治 36～45 年」の見出しの下に、「群馬県師範学校校長羽田貞義の考案によるもので、色刷り、倉賀野尋常高等小学校でも使用した。」との説明文がある。これまでの絵図に関する考察から、使用年代は少なくとも 1907（明治 40）年以降であろう。

38 著書 6 の『世渡り船略説書』を 1911 年 5 月 7 日出版した人物である。絵図「世渡り船」も彼が印刷・発行している可能性が高い。

39 この制作年月日前後 1 ヶ月間の「上毛新聞」記事を検索したが、関連する記事は見つからなかった。

40 前掲『群馬県教育事績』、p.58

41 群馬大学教育学部には当時の文書（定期試験問題など）が保存されており、羽田をはじめとする群馬県師範学校の教育内容分析も幾分可能と考えている。

42 「先生はいつも報徳教に関する印刷物を沢山持参して配布され、又町村の有志者や青年会の幹部に対しては報徳教や地方の自治教化に関する書物を配贈された。私が取次いだけでも少くないから県内を通じたなら夥しき数に上り、その費用も多額に上つてを察せられる。先生が教化運動に就て私費を投じてまで御尽力されたことは到底常人の企て及ぶところではない。」前掲『羽田貞義先生追悼録』、櫻井菊次郎の回想、p.128